春晝

太宰治

青空文庫

四月十一日。

甲府のまちはづれに假の住居をいとなみ、早く東京へ歸住したく、つとめてゐても、なかなかままにならず、もう、半年ちかく經つてしまつた。けさは上天氣ゆゑ、家内と妹を連れて、武田神社へ、櫻を見に行く。母をも誘つたのであるが、母は、おなかの工合ひ惡く留守。武田神社は、武田信玄を祭つてあつて、毎年、四月十二日に大祭があり、そのころには、ちやうど境内の櫻が滿開なのである。四月十二日は、信玄が生れた日だとか、死んだ日だとか、家内も妹も仔細らしく説明して呉れるのだが、私には、それが怪しく思はれる。サクラの滿開の日と、生れた日と、こんなにピツタリ合ふなんて、なんだか、怪しい。話がうますぎると思ふ。神主さんの、からくりではないかとさへ、疑ひたくなるのである。

櫻は、こぼれるやうに咲いてゐた。

「散らず、散らずみ。」

「いや。散りず、散りずみ。」

「ちがひます。散りみ、散り、みず。」

みんな笑つた。

お祭りのまへの日、といふものは、清潔で若々しく、しんと緊張してゐていいものだ。境内は、塵一つとどめず掃き清められてゐた。

「展覽會の招待日みたいだ。けふ來て、いいことをしたね。」

「あたし、櫻を見てゐると、蛙の卵の、あのかたまりを思ひ出して、――」家内は、無風流である。

「それは、いけないね。くるしいだらうね。」

「ええ、とても。困つてしまふの。なるべく思ひ出さないやうにしてゐるのですけれど。いちど、でも、あの卵のかたまりを見ちやつたので、――離れないの。」

「僕は、食鹽の山を思ひ出すのだが。」これも、あまり風流とは、言へない。

「蛙の卵よりは、いいのね。」妹が意見を述べる。「あたしは、眞白い半紙を思ひ出す。だつて、櫻には、にほひがちつとも無いのだもの。」

にほひが有るか無いか、立ちどまつて、ちよつと靜かにしてゐたら、にほひより先に、あぶの羽音が聞えて來た。

蜜蜂の羽音かも知れない。

四月十一日の春晝。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集11」筑摩書房
　　1999（平成11）年3月25日初版第1刷発行
初出：「月刊文章　第五巻第六号」
　　1939（昭和14）年6月1日発行
入力：小林繁雄
校正：阿部哲也
2011年10月12日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春晝

太宰治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/